

## 討 論

### 青少年の自殺

恩 田 彰 (東洋大学)

Akira ONDA (Toyo University)

長 岡 利 貞 (愛知県教育センター)

Toshisada NAGAOKA (Aichi Educational Center)

松 原 達 哉 (筑波大学)

Tatsuya MATSUBARA (Tsukuba University)

内 田 恵 美 子 (横浜いのちの電話事務局)

Emiko UCHIDA (Yokohama Life line Office)

小 林 司 (上智大学)

Tsukasa KOBAYASHI (Sophia University)

昭和61年7月5日、本学会の公開シンポジウムが日本大学文理学部412教室で行なわれた。なおこの文章の責任は司会役をつとめた恩田が負うものである。

村井(事務局)：それでは、これから公開シンポジウムを始めたいと思います。この公開シンポジウムは、応用心理学会の年一回開いております、恒例の行事でございます。公開という主旨に照らしまして、毎回、テーマを選んでおるわけですが、日常生活に密着したものであるということ、それから、時代的なものという風なことで、毎回、テーマを選んでおるわけです。

今回のテーマにつきましても、4月に学会の常任運営委員会で相談いたしまして、こういう問題を考えたわけでございます。

今年は、皆さん御存知のように、4月にあの若いタレントが、投身自殺するという非常にショッキングなことがございまして、社会的に非常に関心と呼んでいる問題でございますので、是非、こういう問題についてということで、今日のシンポジウムとなったわけでございます。

それでは、さっそく司会の恩田先生を御紹介いたします。

恩田(司会)：東洋大学の恩田でございます。どうぞよろしく願い致します。

本日は、たいへんお忙しいところを大勢来ていただきまして、この公開シンポジウムを開かしていただきますことをたいへんありがたく思っております。

今日は、後で御紹介いたします4人の先生から、それぞれのお立場からお話をいただきまして、フロアの皆様などいっしょに、この問題を考え、話し合っていたきたいと思います。どうぞ、後で御活発なる御意見なり、あるいは御質問なりをいただきたいと存じます。

この「青少年の自殺」の問題というか、その前に、自殺の問題については、すでにご存知のように、最近警察庁から、「自殺の概要」という報告書が出ております。これは、昨年の状況なんですが、昨年は23599人という人が自殺をしている。これは、昭和58年が一番ピークで、いくらか少なくなっているようですが、去年の(記録)は、戦後4番目の自殺率といえますか、それを記録しているようです。

それで、昭和30年代、わが国の自殺率は世界一位になったそうで、これは外国でも日本は、自殺の多い国だということが知られておりまして、最近私のところに来ま

した、あるアメリカの研究者も、とうとうあるレポートに、日本の若い人が、自殺が世界で一番多いんだということを書いておられます。

そのような問題を取り上げまして、「自殺の島」なんて呼ばれることもあります。こういう汚名は、なくしてしまわなければならないと思うのですけれども、現状は、否定するわけにはいかないと思います。

それで、自殺といっても年齢的には、2つの極があると思います。一番多いのは、65歳以上の高齢者が多いということです。そしてもう一つの特徴は、14歳以下の小学生、中学生が割合増えているということです。それで特に、この中でコメントがあるのは、その一割強がいわゆるいじめによつての自殺であるということでもあります。

中高年の問題は、これも重要な問題ですけれども、今回は「青少年の自殺」ということに絞ったわけですが、14歳以下の自殺の数は、65歳以上のものとは比較して少ないわけですが、その前の年と比べて21人、すなわち39.9%増えています。21人のうち、9人がいじめを苦しめての自殺ということです。

それから、先程事務局の村井先生が述べられましたように、最近、ある歌手が自殺し、その後おいの自殺をしたものが、かなり多いということが挙げられておりました。

明治36年に有名な、旧一高生の藤村 操が、日光の華厳の滝に“巖頭之感”という遺書を残して投身自殺をしました。そのショックを受けて自殺する人が、非常に多かったという話がありました。人生は不可解である、哲学的に思索し、悩んで後に自殺したであろうと思われていました。ところが、最近の新聞によりますと、ある娘さんを恋して失恋をして亡くなっていたということです。このように原因なんていうものは、いわゆる表沙汰に出てきているものと、その内面にあるものや、中には本当にわからないことも多いし、非常に複雑なものが絡んでいるわけです。

後で先生方に問題提起していただくわけですが、結局これは、自殺を防ぐ、いや自殺の原因は何か、その背景は何か。つまり、これは広い意味で、社会的な大きな構造、世界的な動き、いろんな情勢というものが絡んでくるわけですが、そういう自殺の原因を究明し、基本的には、一番大切なのはいかに自殺を防ぐかということです。それからもう一つ、もっと突っ込めば、いかに人間は生きべきかという問題を、一人一人が徹底的に自覚して生きるということがない場合、なんのために生きていくかというのを、ある御膳立の通りに生きてき

て、どうして人間は生きべきかということ、大人になって、青年になってから考え始めると、そこでいろいろ混乱が生じるということもあろうかと思えます。

人間はいかに生きべきかという大事な問題、命というのは大事なんだということ、こういう問題の積極的な生き方を、どう我々が学び、あるいはどう青少年を指導していくかという、大きな問題に係わってくるかと思えます。そういうような問題に、いろいろな先生方から御示唆がいただけると思えます。

今日のやり方なんですが、一人、15分ずつお話をいただきまして、それがひととお終りましたら、それぞれ5分ずつ補足をさせていただきます。それから、今度はフロアーの御意見、御質問を含めて皆様と一っしょに話し合いをしていく、というような形をとりたいと思えます。

それでは、これから今日のお話しをしていただく、シンポジストの先生方を御紹介していきたいと思えます。

で、一番向こう側の、私の方から左側、皆さん方からですと一番右側になりますが、長岡利貞先生です。(拍手)長岡先生は、愛知県教育センター教育相談研究室長をしておられまして、長い間、教育相談を御担当なさいまして、主に今日のお話によりますと、小中校に係わる、学校教育の中における問題というものが、自殺とどのように関わってくるかというような、学校の構造といひますか、そのようなものを分析されてお話をいただけるというふうに、伺っております。

次の先生は、松原達哉先生。(拍手)松原先生は、筑波大学の心理学系の助教授をしておられて、学生相談です。大学生の相談をしておられて、そういう面から、大学生の自殺の実体、あるいは、それに対する自殺の予防の対策という面についてお話を伺えると思えます。

それから3番目の先生は、内田恵美子先生です。(拍手)内田先生は、横浜いのちの電話の事務局長をしておられまして、死にたいと電話をしてくる子供たちの応待をしておられるわけですが。そういう子供たちを、相談員がどういう態度で接しているか、対応しているかというような問題、青少年の自殺の傾向を踏まえましたお話が伺えるかと思えます。

それから最後に小林司先生です。(拍手)小林先生は、上智大学カウンセリング研究所の教授でおられまして、御専門は、精神医学であられます。先生は、学生相談を通しまして、いろいろ自殺の問題を、長年調査しておられます。そういう面から、また、精神医学の御立場から、御提言いただけるかと思えます。

それでは、早速でございますが、長岡先生からお話を

承りたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

長岡：長岡でございます。与えられたテーマは、15分ではなかなかお話ししきれないと思いますが、私は教育相談ということを経験しておりまして、現在もそれをやっているわけでございます。それで、現に私が相談しましたケースの中で、自殺した子がいます。私は、6年目になりますが、すでに、2人失敗をしているわけですが、その前から長くやっておりました関係で、この問題には関心を持っているわけです。今日、申し上げますことは、こういうことでございます。司会者からも御紹介いただいたんですが、最近では、学校と教師が、自殺、いじめの問題にしり、被告的な位置にあるわけですし、原告としてこれを論ずることは、非常に楽なんですけれども、いわば、私は被告席からすこし物を申さしていただくという形になると思います。それは、私自身の反省であるとともに、日本の学校教育の構造の中に、やはりどこか問題があるのではないかということを感じているわけでありまして、それを申し上げたいわけでありまして。

やはり、最近、死を口にする子供たちが、たいへん増えているわけでありまして、子供の話の中でも、「死んでやる」とか「殺す」という言葉が、やたらと出てまいります。私は、これは4歳から5歳の子供が、うんちとかオチンチンという、あの汚い言葉をいうという時期がありますね。あれにとってもよく似ているんじゃないかと思っているわけでありまして、子供の作文の中にもいわゆる自殺みたいなことを匂わすものがございます。

例えば、小学校4年生の女の子の例を読みますと、

「夕方遅く帰ったら、家に入れてもらえなかったの、小屋の中に入って自殺をしようと思いました。中を探したら、縄があったので、それを柱にかけようと思いました。

私は遺書を書こうと思ったけれど、紙とえんぴつがないので、家から持ってこようと思って、玄関のチャイムをならしたら、お客さんと思ったのか、おかあさんが出てきました。そこで謝って、家に入れてもらいました。」

というようなことが書いてあります。(笑) 小学校4年生であります。もしよかったら、ついでに読みましょうか。

「自転車のタイヤにくぎが刺った。パンクした。おとうさんに言ったら、ねえさんが横から「あんたがやったんでしょ」と言ったので、僕に疑いがかかった。僕は、包丁でお腹を刺そうと思ったが、包丁が見つからなかつたので、止めた。」

たので、止めた。」

小学校5年生の男の子であります。

小学校のことを特に今日取り上げるのは、自殺を固有の、他の問題と違ったという視点ではなしに、他の問題行動と、いろんな形で関連があると思うからです。ちょうど一つの星座でつながっているような感じでありまして、死に係わる問題としては、ユニークでありますけれども、広く、最近の子供たちの問題行動という視点から、取り上げたいですね。特に最近の中高校生には、いわゆる自己破壊的行動といわれる行動が目立っておりまして、自殺や自殺未遂、特に自殺未遂が多いですね。自殺1に対して、未遂は約10倍、死にたいと思ったのは、その10倍。私の想像では、千人規模の高等学校では、一年に一回は必ず自殺未遂者があると思う。10年に一回は、既遂者が出る、ということ想像しておりますが、そういうものが現実にありますし、それに近い自傷行為、例えば左手首を自傷するとか、いれずみをするとか、これはつい数日前あったんですけれども、高2の女子ですね。弟の電気バリカンで髪の毛をみんな切ってしまったというのがあるんですが、これは命に関わることであります。坊主刈りにしてしまいました。思春期やせ症も、一種の物を食べないわけですから、命にひっかかる問題であるし、あるいは妊娠中絶の問題がございます。あるいは、冒険的な遊びをやたら好む傾向があります。登校拒否の生徒に、将来何になりたいのと聞いた時、カーレーサーになりたいというようなことを言っています。またシンナー遊びがありますが、これはやっぱり、最近の子供の自己破壊的傾向ではないかというふうに思うわけでありまして。

いじめと自殺が関連があるということは日本の新聞のみならず、ごく最近例のモーリス・パンゲさんが書いています。「事例の日本史」という本の中に、ちゃんと載っております。つまり、フランスの先生が、日本の子供のいじめと自殺に注目されていまして、その本の中には、実は、非悪質者が、憐れな勇気をふるいつつ、地獄から抜け出す。それが最近の子供の自殺であろうという風に、書いておられましたが、そういう風に、自殺の問題が生じますと、どうしても学校教育との関連が論ぜられるわけです。

私は、こういう風に今の問題を考えております。そもそも学校というところは、私の考えでは、友を求めて集まる場所というふうになっております。これは、2千年前、すでにローマに定義がございます。友を求めて集まる場所ですから、自ずとその集まりは、狼雑であり、喧嘩を極めたものであります。だから、喧嘩、たかり、ゆ

すり、いじめなど、今日犯罪と言われることが、若者の中で日常茶飯に起ったのだと思います。

数日前、私は大阪の適塾を訪ねたわけですが、あその2階は、塾生ですね。今でいう寄宿舎みたいところがありまして、柱には、刀傷がいっぱいあって、真ん中は少し細くなっています。若者の集まり、勉強する場所は、自ずとそういうふうになるわけであると思います。

ですから、今日の学校における問題行動も、そういうものの延長線上にある現象というふうに私は考えているわけです。その集まりを流れに変える、あるいは、さらにそれにリズムをつける、ということが、学校の教師の仕事じゃないかと思うわけです。

そういう集まりが本質でありましたが、やがて、そこで勉強するということが、つけたしになりまして、つけたしであったものが、今、だんだん中心になってまいりました。ですから、勉強勉強というふうになるのだと思います。

例えば、小学校4年の女子の作文ですが、「眠たかったので、眠る用意をしていたら、おかあさんが、『宿題は済んだの』と聞いたので、『まだしていない』と言ったら、おかあさんが、私のカバンを外に投げ出した。私は、泣きながら、『外に投げないで』と言いました。おかあさんは、つんとしていたので、首つり自殺をやりようと思ったけど、怖くなったのでやめました。』

というのがありますが、これは、家庭の中に、勉強という要素が入って、それにおかあさんが、ヒステリックに反応したのであろう、というふうに思うわけでありませう。

さて、日本の学校ですけれども、私は、学校には、3つほどの大きな特徴があると思います。

その1つは、*stability* というふうにいってもいいと思います。日本の学校は、非常にきちんとしておりまして、文部省の学習指導要領に基づきまして、全国一斉に、教育の内容・方法が示されていて、実に整然としているわけで、安易なことでは決して変えることのできない、そういうシステムであります。つまり、*flexibility* が乏しいということです。*flexibility* の乏しいシステムの中で、子供がまず、育つということが、後に申します、四角四面というか、融通の利かぬというか、ピンチとか変動に、たいへん弱い人間しか作らないという結果を引き起こすと思います。

第2は、日本の学校の総合性の問題です。日本の学校ほど、何でもかでも教えてくれる国はありません。箸の上げ下ろし、うんちの仕方から、原子核物理学まで、小学校を卒業して、12年くらいまでの間に、学校教育の中

で教え込まれるわけで、入れものの小さい子供は、せっかくいいお話かもしれませんが、到底それにしまい込むことができない、ということになるわけです。学校教育で、子供が成長に必要な知識を全て押し込もうという。学校教育の中で、これを完結しようというふうになるわけですから、いろいろ無理が出て、勉強を投げ出す子が出て、おかしくはありません。

第3番目の特徴は、安全性ということであります。日本の学校は、アメリカの *vandalism* とか *school violence* とか、あるいは、*school crime*—学校犯罪という言葉が、向こうの本に書いてありますが、それに比べれば、日本の校内暴力など、本当に幕下ふんどし担ぎでありまして、「この土手に登るべからず学校長」という立札一つを立てれば、だいたい、日本の子供達の安全は、保証されるわけでありませう。従って、学校の中では、自分の安全を守るという能力は、育たないわけでありませう。ワルには、こう対抗せよとか、かなわね敵だったら、こういうふうに逃げろ、というふうな生活の智慧は、あまり教えないわけでありませう。

ともあれ、日本は資源の乏しい国でありましたけれども、経済的に、世界に、こう躍進できた背景には、今言いました3つのシステムが、うまく働いたのであろうと思います。ちなみに、数字だけ上げますと、日本では年間240日、学校へ行くことになっているんですけれども、アメリカは、180日であります。60日、余分に勉強するわけですね。アメリカ人は、休みが多いですから、遊ぶ技術が発達する。日本では日曜日でも塾へ行き、休みも宿題がでる、ということでありまして、遊びの技術・暇をうまくつぶすテクニックが、発達致しません。ですから、パチンコとマージャンとキャバレーとカタカナだけの遊びになってしまうわけですね。

さて、欠席の数ですけれども、日本の小学校中学校では、欠席率は1%内外であります。2%を越すと、中学校では校内暴力になります。アメリカでは、6.3%。あるいは、ある数字を計算しましたら、7.3%になります。つまり、アメリカの子供は、日本の子供より数倍学校を休むということでありませう。アメリカでは、先生が、教室内で秩序を保つのに、60%のエネルギーを使うとされていますが、日本では、20%であるとカミングさんが、書いてある通りであります。

日本では一種の完全主義といいますか、完璧主義といいますか、百点満点主義というふうになるわけで、これが子供にとっては、真に苦痛であります。どの教科も、まんべんなく勉強しなければいけない。きちんとしなければいけないわけですね。漢字の学習のように、はねた、

止めた、出た、出ないといったことで、もめるわけであり。どちらでもいいと思うんですけれどもね。宿題提出が、1日遅れたばかりに、先生に叱られて、それがきっかけで、登校拒否を起こすなんてことは、しょっちゅうあることであります。

日本人は、オリンピックの入場式には、一糸みだれずということが大好きで、それにはずれたら、たいへんなことになるというわけであり。

こういうような学校構造に順応できる子は、親や先生から、よい子として評価されるわけです。そして知らず知らず、こういう親、学校が示す鑄型にはまるということになると思います。

それが、だんだん、百点満点じゃなくちゃ、きちんと気がすまない。宿題が全部終わらなければ、学校に行けないというふうになるわけですね。まあ適当なところで、というふうには、まいらんわけです。

これが、完全欲という程度のことならよいのですが、それがだんだんと強迫的な傾向をつくり出します。

日本では、いわゆる登校拒否の出現率が、世界一多いと私は思っておりますけれども、それが、いまのような構造と無縁ではないと思います。しかも先生というのは、正規分布でいう中央値に、子供を集めちゃって、左や右の部分への配慮をどうしてもしなくなる。こういうことになるわけであり。

こういうような鑄型にはまったく強迫的構造を持った子供は、確かに learn すること、いわゆる多様に、きちんと勉強して、先生の質問にきちんと答えるということは、確かにできるかもしれませんが、study するとか、自分で考え、自分で解釈するという力が、なかなか身につけません。おうむ返しはできるんですけどね。そういう子供は、例のピンチ、例えば自殺とかは、いわゆる人生のピンチの1つだと思っておりますが、困ってしまった、行き詰ってしまった、どうしようかといった時に、非常に弱いんですね。人生で、本当に大切な智慧というのは、困った時にどうするかという力が出てくることだと思うんですが、学校ではほとんど訓練されずにきてしまう。こういうことですね。特に、learn から study というふうに、展開する時期の、中学校、高校というのが、真にこの問題が多いというふうに思います。

さらに、教師社会というのは、独特の構造を持った社会で、今申し上げましたような、がんじがらめ、四角四面の教育的構造を持った学校に結びついているわけです。

まあ、簡単に特徴を申し上げれば、教師社会は、等学歴ですね。つまり、学歴が等しいわけです。かつ、単一

職種で社会であります。皆、大学を出ています。それで、卒業なされて採用されると、先輩の先生と全く同じように立ち振舞いをしなければいけないわけです。そうしますと、どうしても先輩のやられたことを見よう見まねでやるわけですから、今自分が少し新しい方法を入れようとしても、たいへんむずかしい。つまり、先輩の鑄型にまた次の先生もはまっていくことになってくるわけです。

そういうふうですと、フレキシブルに、問題に出会ったときに答えるとか、あるいは対処するという力が、どうしても育たないということになります。例えば親子関係がおかしくなった時とか、友達関係にいろいろ問題が生じた時、公式通りの道徳しか頭がないわけですから、さあどうしたものかと迷います。応用のきかない人たちを作ります。しかもそういう応用のきかない人たちが、実は学校では良い子とされてきた。良い子とは、言葉をかえていうならば、親や学校の先生にとって都合のよい子であったにすぎないということになります。そうしますと、「学ぶ」自分で考える力ともう一つ、自らを強くする力が育ちません。日本の学校構造の中に、今日子供の弱さを育む要因があったのではないかというふうに、私は反省しております。

恩田：ありがとうございます。今長岡先生のお話を承りますと、日本の学校教育の構造の中で、子供もそうですし教師それから親もですね。非常にきちっと型にはまった。そういう面の動きが強くなって、いわゆる flexibility、融通性が欠けている。きまった形でおぜんたての上で動くことを学んでいっても、自分自ら主体的に動くというその姿勢、柔軟性が非常に欠けている。そういうところに一つの問題があるというようなことをお話されたと思います。

それでは、引き続いて松原先生からお話を承りたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

松原：筑波大学心理学系の松原です。私からは、最近特にここ一年くらいの間に青少年の自殺が多くなってきていることを指摘したいと思います。特にあの岡田有希子事件以来ですね。そういう自殺増加の原因と、私自身が大学で学生相談をやっている、実際にそういう学生と対応しておりますから、そういう学生、大学生の自殺の実態と、そして予防しているわけですが、その予防の方法を具体的にお話したいと思います。

お手元にプリントが3枚いっていると思いますが、1つは大学生の自殺の実態を、表とグラフに書いたものです。大きいプリントが「筑波大学の自殺予防の方法」です。2枚のプリントでお渡ししたんですが、それを参

考にしながらお話ししたいと思います。

まず一番目に、特に最近の青少年の自殺増加の原因を、いろいろ心理学的に分析したいと思います。交通事故は年々増えておりますが、自殺は、一昨年前ほどはあまりなかったんですが、また最近増えてきました。この自殺の第一の原因は、社会現象でありまして、今、こんなことも教育現場ではさきやかれております。今まで教育現場で何が問題になっていたかと申しますと、登校拒否。それが問題になって次が校内暴力。登校拒否とか校内暴力は、教育現場でいろいろな方法を講じて少し減少しております。特に校内暴力に対する対策として、かなり学校自体で抑えつけるようなところがありまして、暴力をふるいますとそれを力で抑えつけるというところがありまして、その抑えつけられた子供達が、今度はいじめに走るというような面が出てきて、現在ではいじめが非常に問題になっています。このいじめの後どうなるのか。いじめられた子供が、今度は自殺になるということで、いじめの後は自殺が少し問題になるのではないかと一部では考えられておりました。現に、私たちの近くの高校でも一年間にたしか10人程自殺未遂があったようなことを、ちらっと聞いております。自殺はしていないけれども、自殺願望未遂者も徐々に浸透しつつあるんじゃないか。だからこれは、やっぱり防がなければいけないと思っております。

そしてその次に自殺の原因として、自殺は流行現象であるということです。ひとりの人が自殺しますと、これは自殺の本にもいろいろ出ておりますが、誰かがひとり自殺しますと、ああ、ああいう風にすれば確実に死ぬるなど、こんな苦しみを持たなくていいということで、ひとりビルのてっぺんから飛び降りると、次々とあちらこちらで自殺が発生します。

その典型的な例が岡田有希子の事件です。4月8日に自殺をした後の20日間、4月27日の新聞を見ますと、46人も自殺しています。16日間に46人も。そのうち女子が26人です。

これは、1つにはマスコミの影響もあると思うんです。自殺がですとマスコミは悲しむと同時に美化する傾向があるんですね。例えば有希子事件なんかの場合には、死にますと半ばヒロインのような形で、週刊紙、新聞、テレビ、雑誌とかあちこちに賛美まではいかなくても、週刊紙にでかでかとか書かれるし、葬式も立派にしてもらえます。そうなると、秘かに黙々ともがいて悩んでいる人たちが、自分もし自殺をすれば、ああいうような立派な葬式を出してもらえ、また皆が悲しんでくれるだろうと錯覚します。

もう一つのマスコミの影響があります。ドラマなんかには自殺場面が出てきますね。自殺した人が、翌日はまた銀座でどうどうと楽しい劇をやったり、買物をしたりすることがあるわけなんです。だから青少年の場合、特にあんまり真剣には考えていない人の場合、自殺してもまた生きられるような、あんまり自殺を真剣に考えない傾向があるわけです。

そしてその他に原因として、最近の子供は死に対し接触する機会が少ないことがあげられます。いわゆる核家族によって、身近におじいさん、おばあさんが死ぬとか、死んでみんなが悲しむことがなくなりました。身近に兄弟が大勢いて、誰かが死んだりしますと本当に親族みんなが悲しみます。悲しむ機会と死に対して、死というのは人生にとってどういう真剣な問題であるかというような、真剣さが今の青少年には少ないということがあります。

今、NHKのテレビで「はね駒」というのをやっています。今日のドラマでも“おりん”の妹さんが亡くなりました。不本意な結婚をして死んでしまったんです。そういう時に、親族が非常に悲しんでいるわけですね。それで家を払って、今度東京に出ようというのが今日のドラマでしたけれど（笑）。昔は大家族いっしょにいましたね。身内の死に対して真剣に考えていたんです。しかし今そういう面が少なくなりました。こういうことが自殺を少し増やす原因じゃないかと心理的に思うわけです。

二番目に、大学生の自殺は増えているのか減っているのか、どれくらいあるのか。大学生の自殺の実態についてお話ししたいと思います。大学生の自殺というのは、大体10万人に20人の割合が、現在の大体の傾向です。お手元に、茨城大学の中島先生が中心となり10万人の学生を対象として、自殺者が大体どれくらいいるのかを調べ、図にしたものがあります。事故で死ぬ人、病気で死ぬ人、自殺で死ぬ人のグラフがそこに出ております。図の1です。

全国の国公立大学生を対象に調べた結果、昭和54年度は29.6%の自殺率。55年度が13.1、56年度が20.7、57年度が12.2、58年度が20.1、59年度が20.1。大体この大学生の自殺というのは、一年おきに多くなっているんです。ちょっと多いと全学的にそれにいろいろ対応して、1年あとは少ないというような傾向があります。それは全国の実態なんです、学年からいうと2・3年生が多いし、医学なんかでは、やはり5年・6年生の人が、自殺が多いという傾向があります。

私たちの筑波大学では、自殺者がここ5年間だいたい

2名ないし3名だったんです。たまたま60年度一昨年ですが4名の自殺者がありまして、ここ5年間に13名の自殺者がありました。で、その13名のうち実際に相談室に来た学生が5名で、3人がうつ病、2人が分裂病の学生だったんです。私はそのうち2人だけ、うつ病の人を精神科医の人といっしょに対応して相談したわけです。うつ病の人が、一番自殺する場合には多いわけですが、来ない学生さんで自殺する人もいます。

ただうちの場合にはですね、たまたま60年度にですね、12月ですか茨城大学の教授の方が私たちの大学の工学部の建物の一番上の12階から飛び降り自殺をされたわけなんです。そしたら、12月に茨城大学の教授の方が飛び降りた同じ場所から、1月に女子学生が飛び降りて亡くなって、そして2月にも同じ所から、そして3月と4か月続いたわけなんです。それがさっきの自殺とは流行すると言いましたけれども、たいへん見晴しのいいちょうど高島平などのように自殺の名所がありますけれども、いわゆる風光明媚な見晴しのいい所一筑波山がよく見えるところなんです。下をみると本当にぞっとするような所なんです。まあそういうところから飛び降りて、悩んでいる人は完全にここから飛び降りれば現在悩んでいるのを完全になくなると思うのでしょ。確実に死ぬるところを求めて死んでいるというところがあります。だからうちの大学でも、ちょっとそういう事件が続きましたから、筑波大学では次のようなことで自殺予防、特に私たち学生相談室のものが中心になりまして、いろいろ現在やっていることを報告したいと思います。

それが今、プリントの63ページの「筑波大学での自殺の予防法」というものです。それをちょっと御説明したいと思います。自殺した後どうしたらよいかじゃなくて、しないようにどう予防するかということが大事ですから、私たちの場合には入学直後にUPIといまして、これはUniversity Personality Inventoryといつて、多くの大学で実際に、いわゆる問題のありそうな学生を早期発見して、相談、治療をするという意味で使っている項目です。質問紙法です。下に1から6まで書いてあるのがそうなんです。例えば食欲がない、とか、不眠がちであるとか、頭痛がするとか、赤面して困るとかいろいろありますが、その中に25番にですね、死にたくなるという項目、これがキーワードということになります。たくさん項目の中に、そういう項目を入れておくわけです。

ここ一年以内に、特にどういうことを感じたか、どんなことでもいいから感じたことに○をつけなさいと。これは秘密で誰にも言いません。私たち相談員だけが知って、皆さん方が4年間健康で明るくこの大学生活を

する為の資料にするんだと、言ってやっていただくわけです。そして、その下の方に今まで健康上、精神衛生上のことで問題を感じたことがあるかないか。あるいは、そういう相談や治療をしたことがあるかないか。その他、特に相談したいことがあったら、下に書きなさい。例えば、上の食欲がなければ1番、16番の不眠がちだったら16とか、25の死にたくなるということなら25に番号を書いてもいいということで、これをやりまして、そしてそれに対していろいろ対応しているわけです。そして次のページの64ページにTable 2と書いてあるわけですが、実際に「死にたくなる」という項目に対する反応率を、そこに表にしておきました。実際に死にたくなる学生は、一年生が1,535人入学してきて、その内94名で、パーセントが、うちの場合には、学部とは言わないで学類と言っていますが、人文学類、他の大学でいうと文学部に相当しますが、人文学類が13.6%とか、あるいは、人間学類が5番のこれは教育学部に相当しますが、あるいは、情報学類、芸術の人たちが、8番の社会工学類とかいったところが、やや多い傾向があります。体育は1,2で非常に少ないという傾向があります。いずれにしても、こういう項目を見まして、60のうち、4項目は健康な項目ですから、56のうち、35以上の人は、呼び出し相談、その表のすぐ3行下のところに書いてありますが、不適応学生の早期発見呼び出し相談ということで、いわゆる56項目中35項目の学生を呼び出して、授業が終わった後、5時から8時まで夜間学生相談をやっております。そして問題のある人は、継続相談をやります。大体呼び出す人が、150人くらい呼び出してありますが、その内、継続して相談するのが、15名~20名くらい、ずっと一年間くらい、時には卒業するまでずっと継続して相談していく場合もあります。年によって若干違いますが。

そして、それと同時にですね、その3枚目のところに書いてありますが、不適応学生の早期発見と1分面接、これは入ってUPIをやりますね、これをやって、身体検査をやっている時に、私たちが全員に面接するわけです。UPIを見て、25に○をつけている人、特に8番の自分の過去の家庭が不幸であるという人は、いろいろ問題がありそうなんです。そういう問題のありそうな項目について、あるいは、不眠がちであるというような人の場合には、さらに今日はちょっと忙しいから、またあとで呼び出して相談すると、一言言っておいて、そして後で呼び出して相談します。とにかく、入学してすぐに、全員の顔色とか服装・態度を見て、特に問題のある人は呼び出し、顔つなぎをするわけですね。こういう怖い顔

をしていないで、普通の顔をした人が相談するんだからというようなことで、またいらっしやいというようなことです。

時間が余りましたら、また後の時間に御説明したいと思えます。

恩田：ありがとうございました。今、あの松原先生の場合は、主に先ほどは、一人のヒーロー、ヒロインの自殺が何人かの自殺を誘っていくという感染とか伝染とかいう効果があるという話でした。またもう1つは、それを美化していくという面があります。これはまた後でお話がありますが、いわゆる自殺をいいものとするという雰囲気や価値感があるということが、割合に自殺を促進する面があるわけで、こういう問題も非常に考えなければならぬと思います。それから、死に対する経験ですね。いわゆる厳しいという経験が非常にだんだん少なくなっている。おそらく、我々が多くの人に、亡くなった親戚とか、まわりの人で経験があると、死というものは、非常にこう深刻で、非常に厳しいものであると、あるいは厳粛なものであるという面での経験が、非常に少なくなってくるという問題が1つ、非常にあるかと思えます。

そしてもう1つ、御自分の学生相談の御体験から、いろいろ原因とか防止するにはどうしたらいいか。また、その実際の面でのお話を承ったわけでございます。

それでは、次の先生に移りたいと思えますが、次は内田恵美子先生にお願いしたいと思えます。では、よろしくお願い致します。

内田：横浜のいのちの電話で、1人の相談員として相談をうけ、そして事務局にもかかわっております。その横浜のいのちの電話にかかってくる、青少年の自殺について少しお話しさせていただきますが、その前に、いのちの電話を御存知の方も、あるいは、あまり御存知でない方にも、ちょっといのちの電話について、お話しさせていただきます。

いのちの電話のもとというのは、サマリタンズと申しまして、イギリスに35年前に、自殺の予防の電話として始められたのが始まりですが、日本では丁度今から15年前に、東京にいのちの電話ができて、今日横浜にいのちの電話が開局しましたのを合わせまして、日本全国で25のセンターがございます。そしてここで、奉仕しておるボランティアたちは、大体3,500名ぐらいます。横浜では、現在実働1,700名の相談員が24時間相談をうけております。その中でかかってくる青少年の自殺のことについて、少しお話をしていきたいと思えます。

数字的に見ますと、1984年と1985年の2年間で、私ど

も1984年の場合は、実相談数と言っておりますが、ダイヤルを回して、実際に相談を受けたというか、実際に相談のできた数というのは、全体で16,706件でございます。そのうち、青少年の相談はどのくらいあるかと言いますと、3,242件、全体の19.4%に当たります。このうち、青少年の中で自殺志向の高い電話はどのくらいあったのかと申しますと、55件ございまして、その青少年の相談のうちの1.7%に当たっております。1985年、去年の実績でみますと、実相談数が16,969件。そして青少年の相談は3,216件。丁度一昨年とほぼ同じ数が出ております。全体のやはり19.8%で、そのうち自殺志向の高い電話は46件ございました。青少年の相談では、男の子の方からかかってくる電話の方が多いです。その中で自殺志向の高い電話はというと、女性の方からかかる場合が多かったという数字が出ております。

自殺をしたいとか、死にたいとか訴えてくる青少年の数字的なことは、今の様なことでおわかりかと思えますけれども、訴えてくるのは、高校生がその中で一番多くて、その次は、高校には行っていないけれども同世代の人。それから中学生という順になっていて、小学生はほとんどこの数の中には入ってきておりません。中学生はどちらかという和家庭の事情とか、家族関係、家族の中で起きる人間関係とか、先生とか友人、あるいは学校内での問題で、自殺を考えていくことがあります。例えば、自分自身が家族や友人に受け入れられないと感じていたり、独りぼっちだという寂しさ、そういうものが死につながっていくようなきっかけになっていくようです。学校生活では、今問題になっております、いじめ問題とか、あるいは進路を決める時の行き詰まりとか、そういうものが青少年にとっては、死にたいという気持ちにつながっている様です。高校生になりますと、自分自身に目が向けれるというところから、自己嫌悪に落ちたり、あるいは将来に対する不安を感じたり、それから生きることへの意味づけがしっかりできていなかったり、その中で死にたい気持ちが大きく広がっていく様にも考えられます。また1つ、男の子の方では、性に関して自分自身への性の悩みとか、それから身体の事についての劣等感情みたいなものが、自分自身で追いつめていて、死にたくなるという訴えにもなっているようです。

少し事例のことについてお話ししてみたいと思えます。いのちの電話は、匿名性を尊重していますと同時に、非常に秘密を厳守しているというところで、事例については非常に気をつけて発表させて頂いておりますので、そのつもりでお聞きになって下さい。

例えば15歳の女の子ですが、この子は現在精神病院で

治療を受けるようになりました。「死にたいと思って自分でどうしていいかわからないんです。小さい時から家族の中で孤立していたんです。私は母親の道具です。家庭教師の事とか、女子校に入る事とか、やれブランドものがどうだとか言われても、私は何にも欲しくないのです。何にも嬉しくないんです。もう半年も学校に言っていないんです。母は私に精神病院に行行って平気で言うんです。それから、お兄さんやお姉さんと私に対する扱いが違うんです。だから母親が普通的人格を持っているのに。私は一体これからどうなるんでしょう。」という様な訴え方をしてくれております。いのちの電話でも、私のようなものは死んでほしいと思っているでしょ、というふうにも言いました。自己主張もできずに、ストレスをためて心を痛めているんだということが、本当によく伝わってきます。

それから、また中2の女の子では、しばらく沈黙の後に、「私は母にいじめられているんで、もう死にたいんです。名前を言ったり電話をしたのがわかると、叱られてしまうし、もしかしたら殺されてしまうかもしれない。今のお母さんは、どうも…ちがう、産みの母親ではないようでした。今のお母さんは、私のことを知恵遅れだと言うんです。今一番欲しいものは、食べものなんです。学校の給食費も払ってくんないし、私が何か話すと、ませてるって言うんです。」誰かに生きていいと認められたいと言ってきました。この言葉は、相談員の胸にもじんと痛みを感じさせられる言葉で、つらい毎日の中で生きていきましょう、という声をかけてくれる人がいない彼女が、だんだん暗いひと隅に追いやられていくという様子が、すごく伝わってくるんです。でも、この子が電話をかけてきてくれたことで、私どももほっとしました。

また、中学校3年生の男の子なんですけど、「もう何もかもやんなってしまった。親は兄弟3人を自慢している。そんなことがとつてもバカらしい。自殺を企てたり、シンナー遊びや、不純異性交友もしたけど、もう自分が自分でいやになってしまった。生きていても仕方がない。」というふうに訴えてきています。今までのこの話の中で、彼の生活をずっとと思ってみると、本当に相談員も何ともやるせない気持ちに追われてしまうのですが、こんな思いに至るまでに、本気で彼と話をした人が、一体いたのでしょうか、という思いです。どんなに自己顕示欲が強くて、目立ちたがり屋だったかもしれないけど、今では、本当に生きる望みもなくしてしまって、死ねことばかり考えているわけですが、自分で自分がいやになるほど、自分を否定してしまって、もうどう

するんだろう、という思いにとらわれます。彼自身にもいろいろ問題があるでしょうけど、そこまでいくには、大人の責任が多いのではないかなということが思われます。彼は自分の思いを話すことで、自分の嫌さといえますか、自分を否定している部分を、たくさんにだしてきます。そして、自分が本当はどうしたいのか、ということをはつぽつ話してくれるようになるまでに、非常に長い時間がかかるわけです。でも相談員は彼を否定することなく、全面的に受けとめて、話を聞こうとします。だんだんと心がほぐれて、自分を新しく見つけることができるようになるまで、じっくり話を聞いていきます。こんなに自分のことを話したことないや、というふうな言葉がでて、素直な彼の一面を見せてくれると、ほっと胸をなでおろすような感じがするんです。

こういうような、いろいろな事例の中で、もう1つは、女の子の場合は妊娠という問題が非常に大きく関わってきます。ある高校生のことなんですけれども、卒業をしたらもう家を出たいと思っていた時に、丁度彼と知り合ったというんですね。この子が親戚の民宿を手伝っていた時に、彼と仲良くなって妊娠をしてしまった。もう、高校にもいられなくなって、やめたんですけれども、その時は子供を産むことを彼も賛成してくれたんで、そのつもりでいて、妊娠6か月過ぎまで田舎にいたのですが、彼を頼って東京に出てきたわけです。彼は私のお金をとりあげて、私は昼も夜も働きました。でも、私がもうsexに応じられなくなったら、女をつくって家を出てしまっ行って行方がわからなくなってしまったんです。借金は残されるし、出産を控えてもうどうしていいかわからないから、もう子供が死んでくれたらいいとしきりに思ったりもします。いや、独りで産もうとも、今度は決心したりもするんです。でも子供だけは死なせられない、一緒にじゃあ今度は死んでしまいたいと思うこと、この揺れ動きの中でどうしていいかわからないんです。でも本当のことを言えば、子供を産んで一緒に生きていきたい、という言葉を書いていました。この言葉で彼女がどうしたいのかがはっきり分かるわけなんです。死にたいのではなくて、この子を産んで育ててあるいは彼と一緒に暮らしたいということなんでしょう。

温かく見守ってくれる人もなくて、じっと耐えてきたけどどうにもならなくなって電話をかけてきたこの彼女の気持ちが本当によく伝わってきました。裏切られた事柄をいっしょうけんめい語ってくれる中でも、この小さい生命をかばおうとするやさしい彼女の心が伝わってくるわけです。彼女が安心して子供を産んで育てられるようにと婦人相談所を紹介しました。このように妊娠を訴えてく

る青少年は、ひとつは、もう一方ではあっけらかんと中絶をするお金はいくらかかりますかとか、病院はどこがいいところはありますかとか、口では強そうに言っているけれども、不安は隠せないという感じです。もう一つが先程の子供のように誰にも言えずに彼にも知らん顔され、親にも話せないで自殺を考えていくという少女もいるわけですが、ともかくひとりで考えないでひとりで中絶を決断しないで、周囲にいる一番信頼できそうな人を、あるいはそれが母親かおばあさんか兄弟か友人か友人のおばさんかわからないけど、ともかくひとり、自分がしっかりその人に相談するようにと言います。そういうように、青少年の死についての捉え方というのはいろいろ考えられますけども、いやなものとかつらいこととか、みにくいこととか、疲れてしまうようなことから逃げたいとか、消えたいという思いを遂げようとするのが彼らの自殺の考え方だと思うんです。

そこには生きることへの執着とか、生きることの意味づけを思い出そうとかいうことへの努力はないようです。でも自殺をほのめかして電話で訴えてくる青少年は、なんとかきつと生きていくだろうと思うし、私どもが関わった青少年が今度は、自殺をしてしまったということは、全然電話ですからわからないわけですけど、きっと生きる道を見つけてくれているだろうと思っています。

いのちの電話では、私ども相談員が、青少年の訴えにともかくそのままの状態をそっくり受けとめて、今の死にたい気持ちを十分話すことによって自分自身がどうしたいのかを確かめることにつなげていこうということです。その暗い場からどうやって一步でも横でも縦でもいい、上でもどこでもいいからその場から動けるようになるっていこうということを、いっしょに考えながら進もうと努力しています。そして一緒に生きることを考えている人が、ここにひとりいるんだという、そういうことを話し合っていきます。

電話ですから限界がありますし、切られてしまえばそれで話しがつかなくなるんですけど、本当につながらている間、その電話の向こうにいる彼、あるいは彼女を一生懸命に大切に関わっていきたくて努力しているということです。以上です。

恩田：はい、ありがとうございました。いのちの電話のお話をうかがってますと、まさしくそこに電話っていうんじゃないかと、そこに人がいるようにお話をしていたでいて、非常に私としてもある感動をもつてうかがったわけです。一生懸命聞かなくていいか、相手の気持ちを受け入れるっていいですか、そういう面がひとつのカウン

セリングの大きな態度だと思います。私がいるんだっていうことに相手に伝え、それから自分ももちろん実感しながら相手に話すということがあり、距離がありません。ようするに心のふれあいていいですか、自分がいるんだよと、一緒に行こう、生きていこうとこういうようなことが本当にカウンセラーの気持が相手に伝わっていく。そうすることによって、生きようっていう勇気がでてくるということですね。ま、こういう面で、なるほどいのちの電話っていうものはその性格っていいですか、なにかやっぱり我々のカウンセリングのいわゆる本質的なものがそこにあると思います。逆に言えばその距離があるからこそ、そういうものが如実に出てきているというようなことを感じた次第でございます。

それでは最後に、小林先生からお話を承りたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

小林：今日のシンポジウムの目的は、さっき司会の先生からおっしゃられたように、自殺をどうやって防ぐかっていうこと、あるいは原因にどういふ対策をたてるかと、そういうことが述べられなくては、あんまり意味がないので、そういうお話をしたいと思うんです。

その前にですね、私が知っておりますのは、高校を出て大学へ新しく入ってくる学生さん達、つまり大学に入らない人に関してはあまり知らないわけですが、大学に入ってくる人達、これは日本でも非常に数が多くなっているわけですが、その中でですね。およそ何人ぐらいが自殺をしたいと思っているのか、本当にやっちゃったのか、というふうな実態をふまえていないと、対策のたてようがないんじゃないかと思えます。そこで、もしもそんな自殺考えている人は、ひとりもないんならば、考える必要はないわけですし、非常に大勢いるんならば、他のことはほっといても一生懸命対策をたてないといけないですから、何よりもまずそういう実態の把握ということが大事だと思いますので、そのお話をしましょう。

私は上智大学に勤めているわけですが、今からお話するのは、別に上智大学のことでなくて、日本のいろんな大学で調べたデータを御紹介したいと思います。まずですね、そういう大学生になる人達が置かれている現在の日本の社会、それはさっきからいろんなお話がありましたように、どうしてもその学生に影響を及ぼさずにはいられないわけです。社会の中で、例えば精神病やなんかどのくらいいるかと、これはあんまり皆さん御存知ないと思うんでありますけれども、5年前のアメリカの調査では全国民の中の20%が精神障害者であるという、そういう詳しい調査があるわけです。つまり20%といいま

すと、5人に1人で、しかもこれは赤ちゃんまで入れての数でありますから、そういうのを除きますと成人、つまり中学生以上ぐらいの人でみますともうちょっとパーセントが高くなります。それから5年前の調査ですから、最近の5年間の伸びを勘定に入れますと、おそらく今では25%ぐらいだと思うんですね。成人の中でということ、4人に1人、つまり一軒の屋根の下にひとり精神障害者がいる割合になります。これは大変なことですね。私が病気が、妻が病気が、子供2人のうちどっちかが病気がと、核家族であればそんな感じだと思うんです。この精神障害の中には精神分裂症とか、そううつ症という重い病気ばかりではなくて、慢性の不眠症とかですね。或いは慢性の頭痛とか、或いは心身症なども含まれます。その中には実は私もそうなんですけれども、また十二指腸かいよう、胃かいよう、じんましん、そんなもんも含まれるわけですから、この聴衆の中にもずいぶんいらっしやと思います。そういう人たち全部を含めて、心がなんらかの意味で健康に働いていないというのを、全部ひっくるめましての数ですから。とにかくそんなふうで、アメリカでは、4人に1人ぐらいは精神障害だというデータがあります。

日本ではどうかと申しますと、これは全国民の調査がないのでよくわからないわけですが、最近はいろんな大学で新入生について、全員を精神的に健康チェックをするようになりましたので、各大学の情報を持ちよりまして交換いたしますと、かなりのことがわかってまいりました。多い大学では、大体新入生の14%ぐらい、少ない大学でも10%内外ぐらいは精神障害者だということです。さっき言ったような意味での、そういうことを念頭に置きまして、今度は新入生の中でどれぐらいが自殺を考えているかということをお紹介したいと思えます。

新入生全員に、あなた、過去一年以内に自殺したいと思ったことがありますか、というふうなことを調査した資料がございます。それでみますとですね、死にたいと思ったというだけは、大体一割ぐらいいるわけです。本当に首しめるなわを買ってきたっていうのから、空想みたいにちらっと心の片端をかすめたという程度まで、いろんな段階があるわけですが。とにかく一割ぐらいは、そういうことを思っている。実際にですね、自殺未遂をやっちゃったっていうのは、どれぐらいいるかといいますと、これが意外に多くて0.5%ぐらいいるわけです。やっちゃって死んじやったっていうのは、もちろん入学してないわけですから、いると思うんですが、これはわからないわけです。

やって生き返ったっていうのが、もし仮りに千人、新入生がいますと、その中で、5人ぐらいは経験者で、その他に今でも毎日死にたいと思っていますという人が、新入生の1%ぐらい、つまり千人について10人内外はいるわけです。

それでは、そういう新入生だけではなくてですね、2年生3年生4年生も含めて、一つの大学でどれぐらいの自殺者が出ているかっていいますと、さっき筑波大学の例がちょっと出ましたけど、いろんな大学によって違うわけですが、例えば西の方のかなり大きい国立大学では1年に15人死んだというふうなところもあります。やっぱり自殺の名所ってのは学内に出かまして、時計台がそうであります、皆はそこへ登っては飛び降りるんで、立ち入り禁止になったなんて話しも聞いております。東の方の関東地方でも大きい国立大学ですね。一年に10数人死んだと、いうふうなことがあります。さっきお話ありましたが、青少年の自殺っていうのは、人口10万人に対して20人内外というのが、普通の都市の一般青少年ですね。大学生じゃなしに、平均値のようでありますけども、一万人ぐらいいる大学ですと、年に1人ないし3人ぐらいは、都市によってばらつくわけですが、死んでいることになります。これは実は大変なことでありまして、我々の子供が地方の出身で、子供を東京へ送ってたら死んじやったと。これは親にとっては大変なショックでありますから、なんとしても防ぎたいと思うわけです。

そのために、自殺未遂を経験した人を調べてみますと、どんな理由で未遂をやったかっていうと、一番多いのがですね、前途に対する不安なんですね。普通は、青少年ですから、例えば失恋したとか、家庭内でお父さんとうまくいかんとか、そういうことが原因じゃないかと思って調べたわけですが、実はその前途に対する不安が主な理由でありまして、これが40%以上、都市によっては50%ぐらいになっております。

これは3段階ありまして、受験生でありますから、志望する大学へ入れないんじゃないかという不安がひとつあるわけです。

それから、もう一つは仮にうまく入れても、卒業してから自分が志望するような職種に就いたり、志望する会社に入れないんじゃないか、そういう不安。それからもっと大きいのは、一生の間なんか生きていてもしようがないんじゃないかとか、なんか自分がこの思っていないような仕事をさせられちゃって、生きてる、仕事する意味がなくなるんじゃないかとか、そういう漠とした前途不安。その3つに分かれるわけですが、それが一番多いわ

けです。

その次の理由というのは、人間関係です。例えば友達に裏切られたとかですね。そういう人間関係が大体15%ぐらいあるわけです。それから季節ですね。よく、春になると、なんか気がおかしくなって、やっちゃうんじゃないかっていうふうに、俗世間ではいっておりますけれども、受験生で調べますと、やっぱり秋と冬、受験のストレスがたまってく頃が多いわけです、夏は未遂の場合は少ないんですけども、男女多少差がありますけども、男の場合は春、秋、冬っていうのが全く同数で、夏がゼロです。それから女の場合はですね。夏が一番多くて、その次が春というふうになってるわけです。

死にたいと思うのは、発作的にちらっと思ってやっちゃうのかと思うと、そうじゃありません。未遂の人をみますと一年中悶々と思ってたっていうのが一番多くて、大体3分の1ぐらいはそういう長いこと思い悩んでるわけです。一年中が33%、半年思ってたっていうのが20%、2,3か月思ってたっていうのが13%で、合わせますとこれは60%以上になるわけです。それから、やっちゃったって人を調べてみると、空想的に死ねたらいいわねってなことを夢みるというんじゃないくて、真剣に考えたっていうのがほとんど9割を占めているわけです。それから未遂者の性格を調べてみると、例えばうつ病的な、ゆううつで悶々としている人がやるのかと思うと、意外にそうじゃなくて、男と女でちょっと違うんですが、男の人の性格特徴を見てみますと、非常に過敏で、神経質で、非社交的で気分が変わりやすいというような特徴があります。女の人では、神経質あるいは敏感というのは男と共通しているわけですが、その他に心配症とか理想家肌、理屈っぽい、完全癖と、こんなことがあっております。

ですから逆にいえば、こういうことを封じていけばいいわけで、ま、100点採ろうと思うとかですね、自分の理想のようになかなか世の中いれないんだから、理想通りの生き方するとか、そういうふうな指導法がある程度効を奏するんじゃないかと思うんです。

次にですね、未遂はしなかったけれども、死のうかしらと思って考えたことがあるという人を見てみますと、いまの未遂と比べて、相当色彩が違うわけですね。真剣に考えたのは、わずか17%ぐらいしかいないわけです。それから一年中あるいは半年、2,3か月という長期間自殺のことを考え続けたっていうのは、1割ぐらいしかいないんで、みんな瞬間的とかそういうふうなんです。それから季節でいうと冬が圧倒的に多い。これは受験生でありますから、冬が4割ぐらいであります。しか

し理由を見ますと、未遂の人と共通しております、前途の不安というのがやっぱり40%ちかくあるわけです。恋愛とか家庭というのが、1割ぐらいつあるわけで、人間関係は、8%ぐらいしかありません。そして、自殺することを思ったという人のうちで、あきらめないで今でも思い続けているというのは、ちらっと考えたといううちの4.6%になります。

このように、冬に多いとか前途の不安が多いとか、いろんなことを考えますと、自殺の原因については、入学試験が相当重荷になっているんじゃないかという気がします。それから、私、精神科の医者ですけども、一般的にはやっぱりうつ病の人が一番自殺をしやすいわけです。うつ病の入院の人をみますと、そのうち大体3割ぐらいは未遂をやったことがあるといって入院してきます。自殺未遂をしたのを片端から調べてみますと、大体85%ぐらいはうつ病です。自殺をやっちゃったという人を家族やなんか聞いてみますとおよそ70%ぐらいがどうもうつ病だったらしいというふうに思えるわけです。精神科の医者としては、そのうつ病の患者をなんとかして自殺しないように、くいどめるのが非常に大切だと思います。大学生のうちでうつ病がどれくらいいるかというと、新入生のうちのだいたい5%ぐらいがうつ病で、治療を受けにくるわけですが、治療を受けない潜在的なうつ病というのは、もっといると思うのであります。そういう人が、実際、私死にたくなっちゃった、と来た場合にどうするか、一番有効な自殺を封じる手段っていうのは、即座に今日役に立つっていうのは、やっぱり薬です。

カウンセリングでなんとかやろうと、無理してやったケースがあるわけですけども、だいたいうまくいきません。薬でとにかくある程度ひきのばし、ひきのばしているうちに、カウンセリングで、考え方をかえていくというふうなのがよいようです。やっぱり生きがいがいないケースが自殺いたしますんで、司会者の言葉にもありましたけれども、どういうふうにして、生きがいというものを与えていくか、或いは自分で発見していくかということの相談に協力していくということが、非常に重要ではないかと思えます。

恩田：ありがとうございます。先生は、いろいろ学生相談を広くやっていらっしゃったり、調査を非常に長年にわたって精密にやってこられてまして、自殺未遂というものと、それから死にたいと思うもの、その違いあるいはまた、どういう気持で自殺が起こるのか、前途に対する不安がどうかからむのかなどにふれられました。それから未遂者の性格、男と女の違いなども指摘されました。さらにまた、自殺を防止するにはどうしたらいいか、

のお話をなさいました。

それでは休みに入る前に、一言、それぞれの先生方から、御発言を頂きたいと思うんですが、できれば三分か四分ぐらいで補足して下さい。各先生方から、お話を承って、それから休憩をとりたいと思います。それでは、まず長岡先生からお願い致します。

**長岡**：私は日本の学校構造が、今の様ないきずまりみたいな子供達をつくりやすい背景があるということを言いましたが、それをつき抜ける、まあ何て言うのか、チャンネルというものを考えているわけです。子供の自殺の中に一種の攻撃性、これが自分に向ったと思われるケースが多いと思います。日本では子供を天真爛漫・純粋無垢というふうに見すぎています。生のままをみると、子供には攻撃性があるということを見なおす必要があると思います。いじめというのは、その典型なんです。そこで、そういう攻撃性をどこかで、うまく発散させるチャンネルを作ることが必要です。

暴れ川を治めるために放水路をつくるという、そういう考え方をとらないとダメです。

**恩田**：ありがとうございます。それでは松原先生、お願いします。

**松原**：私からは、先ほどの筑波大学の予防の方法を追加としてお話ししたいと思います。プリントの65ページのところに、ちょっと書いておきました。学内のいろんな学生用のパンフレット、うちでは“TUKUBA STUDENT” 或いは“学生相談だより”とかいうもので、心の健康だとか、自殺予防についていろいろ啓蒙しています。

その他、学生相談室の中にいのちの電話をおき、電話相談もやっております。24時間、私たちカウンセラー2人と精神科2人と4人が交代で相談をしております。あと、学部長会議だとか或いはクラス担任などへの啓蒙、説明なども毎年やっております。なお、具体的に先ほど12階の建て物から飛び降りたような場合、ちょっとした改善で防ぐことができると思うんです。12階から4人も飛び降りましたから、私もびっくりしまして見に行っただけです。そこの非常階段は工学部の建て物でしたが外へ出られますが、外からは階段の中へ入れないようにしているわけです。ですから、中からふらっと非常階段に出ますともう入れないわけです。そこで、入り口に、ここは外へ出たらもう入れませんから、特別な時以外は出るなど書いておけばいいわけです。そのほか、“ちょっとまで”という貼り紙をしたり、今は、茨城いのちの電話のパンフレットを貼ってあります。そうするとだいぶ少なくなりました。

そのほか、私達は、大学当局に、12階の廊下に公衆電話を置けと、学長に提言しておりますがこれはまだ実現していません。こうやって今のところは、かなり連鎖反応はなくなっております。それですから高島平なんかもうちょっと工夫したら自殺は防げるんじゃないかな、という感じもします。なお最後に、私、こういう自殺の相談、自殺の予防というのは、カウンセラーとか、いのちの電話だけで防げるもんじゃないと思います。一番防げる人は、やはり、親であり、友達であり、先生、身近にしょっちゅう接触してる人が、その人の気持をよく理解して、いい聞き相手、相談相手になることだと思います。私達カウンセラーであっても、毎日24時間あつていられないわけで会う時間は僅かです。一番大切なのは、身近にいる人がもんもんとしていたり、いらいら、食欲がなくなって眠れないとか、時には死にたいと言ったり、部屋に籠ったりしがちな人を見たら声をかけ、相手の話を聞いてあげることが大切です。心理学でいう共感の姿勢をもつことが必要です。周囲の人が嫌なことでも気長に、真剣になって聞いてあげ勇気づけることが大事じゃないかと思えます。そして、相談する場合、必ず次の予約を取っておくことも大切です。そうすると、必ず来ます。相手にもやはり助けられたい気持ちがあります。ですから今度また何日に、何日の何時に会おうって、必ず予約し、約束しておくことです。繋がりができると、その内に、自己洞察します。目標を持って生きようになりますから、そういうことも必要じゃないかと思えます。何れにしても周囲の者みんなが協力することが大事じゃないかと思えます。

**恩田**：ありがとうございます。それでは引き続いて内田先生お願いいたします。

**内田**：私共相談員というのは、素人の集団ですけれども、一年の訓練を受けて、人の気持ちを聞くことを中心に学んでおります。それでも私共には限界があります。ですから、相手の方が、是非治療に繋がりたいとか、それが必要であるということの方が分かりました時は、カウンセリングに繋がるとか、或いはお医者さんに見て頂くように勧めることをしております。どこへ紹介したらいいかわからないといけませんので、私共には医療相談、心理専門相談、法律相談と3つの専門相談を、自前で持っております。弁護士5人、医療相談のドクターが18名。そしてカウンセラーをして下さる心理専門の相談の先生方も18名おります。全部ボランティアで、水曜日とか、土曜日とか、日を決めた中で、お話しを聞いて頂いております。治療が必要ならば、さらに病院を紹介するとか、心理の方では、今度は継続的にお話しを聞いて

いくという姿勢も試みております。一般相談員が、全部を引き受けようなんていう気持ちは毛頭持っておりませんで、この点をつけ加えさせていただきます。

恩田：はい、ありがとうございます。それでは最後に小林先生お願いします。

小林：さっきちょっと申しませんでしたけれども、未遂をした人と、本当に死んじゃって、我々の調査にひっかからなかった人、その差を申し上げたいと思います。未遂の場合は男女だいたい同数です。ところが、もう死んじゃった人を見ますと、男が3に対して女が1ぐらいの割合です。つまり女は助かり易いということです。逆に言えば、手首をちょっとかするぐらいにカミソリで切るとか、あんまり確実に死ねない方法を、女性は選ぶ傾向があるんじゃないかと思えます。それから、さっき人数をごたごた言いましたんで、おわかりにくかったと思いますので、もう一ぺんまとめてみます。仮に学生数が一万人いる大学ですと、1年に一人から三人ぐらいが死ぬことになります。それから千人を単位としてみますと、未遂の人が1年に5人ぐらいはいる。それから、未遂までは至らないけど、死のうかなと思った人がその倍ぐらいいます。未遂でも助かった後、再び実行する人がいますので、これらを合わせると15人位になります。さらに、千人の内、百人から120人ぐらいが、一瞬であるにせよ自殺のことを考えています。こういうデータがあるわけですので、対策としては、さっき申しましたように、原因に対する対策、例えば受験が原因ならば受験制度をやめてしまうとか、そういう原因の対策が必要であります。大学の場合はですね。レポートとか期末試験なんかが相当ストレスになってますんで、私達のところでは、うつ病で自殺を仄めかしてるような場合は、教授の先生にお願いして、レポートを延ばしてもらおうとか、試験も口答に変えてもらうとか、そういう便宜をお願いしています。それから筑波大学の先生もおっしゃいましたけど、死にたいと思った時に、相談に来れるように窓口をたくさん造ることが必要です。我々の大学では5つも6つも窓口があります。保健センターとか、カウンセリングセンターとか学生課とかいろいろあるわけですが、なるべくたくさんの窓口を設けるのが必要だと思います。それからもう一つは、さっき言いましたように、死にたいと思うのは、うつ病の場合が多いわけなので、それを早期発見することです。そのためには、うつ病っていうのはどういうサインが一番初めに出てくるのか、例えば眠れないとかやる気がなくなるというサインを見分けることが必要です。それからもうひとつは、大学全体の中に、精神障害に対する差別感があるとダメ

です。保健センターの門を潜りにくいか、友達が、あれは確かにうつ病だとしてバカにするような状況があるとよくありません。うつ病とか、他の精神病でも、足を折ったとか、或いは盲腸炎だとか、肺病と全く同じように考え、差別を撤廃する体制というのが大事だと思っております。最後に、やっぱり生甲斐が無い、幸福感が無い時に死にたいと思うわけですから、自分が幸福であるってことをどういう時に感じるか、或いは生甲斐をどうやって与えるか、或いは自分で発見するかということをも多角的に考えていく必要があることを指摘したいと思えます。死ぬことがどういうことか、はっきりわかってくれば、そういうことはやめようということにも繋がるので、人間の死、生というのを考えなおすということが、やっぱり大事じゃないかと思っています。

恩田：はいありがとうございます。ひととおりシンポジストの先生方からのお話しは一応これで終わりたいと思います。休憩後、フロアの方からも活発な御意見、御質疑を頂きたいと思えます。それでは、休憩いたします。

#### <休 憩>

恩田：それでは時間が来ましたので、これから討論、話し合いにうつりたいと思います。で、御質問の時、所属と御名前をお聞かせ下さい。

亀井：私、関東学院大学の亀井と申します。松原先生に御話を伺いたいと思えます。私も中国からソビエト、各国行ってみて、消費国家と、共産主義国家と比べると差があることを感じました。中国やソ連では自殺率が非常に少ないと、いうことです。若い人が国家を造るためにやらなければならないという意識を強く持っているんですね。それに対して、日本の場合は極めて恵まれすぎています。だから生甲斐を持つということも無く、ただいい学校を出て、いい就職をして、いい奥さんを貰って、なるべく仕事もしないで月給だけ多く貰いたい、というような傾向が非常に多いと思えます。私が、カウンセリングの所長をしておりましたとき、こんな経験もっています。学生が死にたいって言ってきたとき、ショック療法で、そんなに死にたければ、日本では非常に人が多すぎるので、どんどん死ねと言いますと、彼らは死なないんです。それでこうしたショック療法も結構有効だと思っております。そのことで社会主義国家と資本主義国家の差について、お話を伺いたいと思えます。

松原：はい、私もあまり詳しくは知りませんが、中国にはちょっと行ったことがあります。ソ連はただ寄っただけで、よく知りませんが、やはり社会主義国家というのは、国全体がひとつの目標を持っています。学校教

育でも国の為とか、かつては毛沢東の為とか、教室にも毛沢東の写真があったり、幼稚園から小学校までずっとあるんですね。だから、誰々の為、国の為、人民の為という目標を持っています。日本ではそういう目標が、小中高大通して、ないわけですね、非常に経済的には恵まれているけれども、精神的に、豊か過ぎて目標がない。だからマイホーム主義で、生甲斐感が無いという点がありますね。事実、人数からいうとソ連や中国の方が自殺は少ないかも知りません。そして、もうひとつ、宗教がかなり影響していると思います。仏教は、自殺を予防する、そういうブレーキにはなっていないんですね。キリスト教ではバイブルに、自殺は冒瀆であるとか、罪深いものとして取り扱われています。特にカソリック系の国は、非常に自殺が少ないといわれております。これに対し、日本の場合は、有名人の自殺、太宰治とか、三島由紀夫、或いはノーベル賞貰った川端康成とか、東京オリンピックで2位になった谷谷選手とか、著名人が自殺、それを賛美するような傾向があります。マスコミも考えてもらいたいと思います。しかし、福祉国家でも自殺が多いという現象があります。スウェーデンとかノルウェーなどでは、国が生活を保障し過ぎています。働かなくても生活ができる。こうした面があるのかどうかわかりませんが、スウェーデン、ノルウェーは非常に自殺の多い国です。ですから国の政策なんかも考えなければいかんと思います。

恩田：仏教が抑止力がないということですが、ちょっと反論したいと思います。仏教には御存知のようにいわゆる殺生戒というのがあります。生命を粗末にはいけないという教えがあります。それゆえ、抑止力がないとは言えないのではないのでしょうか。宗教では、生命を大事にするということで、決して自殺を奨励してはおりません。むしろ禁じておると考えてよいと思います。

松原：そうですね、恩田先生は禅の研究者で、大家でいらっしゃる。私も必ずしも抑制力がないとは思っておりません。キリスト教の熱心な国では、自殺すると葬儀もやらないという国も有るんですね。確か、インドか、東南アジアでは自殺に対して厳しい掟が有るんです。自殺した場合、葬儀を出さないということがあります。

黒堀：黒堀と申します。会社員やっておりますが、長岡先生にお聞きしたいのです。今日、価値感というのが複雑化してきている為、個人個人でもいろんな価値感というのが出て来ると思うのです。教育という面で考えると、今の体制ではどうしても先生1人に対して生徒が30何人とかいう感じになっていると思うんです。こうした体制に対して、どのようにお考えか、お聞きしたいと思

います。

長岡：難しい問題ですね。もともと教育は1対1だったんですね。家庭教師の下で学ぶというのが原型だったんです。ローマがそうです。子供は決して先生のところには行かないんです。それが、家庭教師が雇えなくなり、大勢が束になって学ぶようになりました。子供はたくさん集まっている所へ喜んで遊びに行きます。実は、子供が天然自然に集まる力をもっている事に乗っかって、学校というものが出来たといえます。ついでに色々な事を教えてやろうと、学問が、後からくっついて入ってきたわけです。おそらく世界感、生き方という教育も後から追加されたのかも知れません。つまり学校は“流れ”です。独りで出来ないことを“流れ”の中に乗って身につけることがいっぱいできてきました。先生に学ぶんじゃないくて、友達同志で学ぶことが、実はたくさんあった訳です。先生が今日お休みだつていうと皆んなはしゅんとせず、“あー”とって歓声を揚げるというのが学校の本質です。ですから、あなたがおっしゃったことは、先生に何か物を学ぶことだけとお考えになっているのは残念ですね。むしろ横からもっと学ぶべきだ、これがももとの姿だと僕は思います。ただ、その時、できれば個々の生徒に則しての通りだと思えます。おそらくその限度は、30人ということになると思います。それを超すと、優秀な先生でも難かしかろうといわれています。アメリカでは、先生の素質、能力が平均的に日本より低いので、不足分をコンピュータとか機械でもって教えてた訳です。日本の先生はかなりそれができるといわれております。おっしゃったように何十人かの生徒を一人の先生が1つの考え方もって教えてるとおっしゃったんですけど、そうでしょうか。つまり、先生の懐が深ければいい訳でしょ。僕はそういうことだと思うんです、優秀な小学校、中学校、高校、それから大学へと順調に進み、ぽつと現場に出てくるわけです。親にもいい子であったし、先生にも良い生徒としてきた人がそれをまた学校で繰り返してしまうんです、ですから教師になる人は、きちんと然るべき所で、特に大学でもっと自由に幅広く考えるべきですね。

恩田：はい、よろしいですか、それでは前の方。

亀井：それに続いてなんですけれども。もし子供自身がそれぞれ生き方を解決していくというふう考えるならばですね。今、いじめが問題になっています。先生の方では、それを奨励してないと思うんですが、それが為に、自殺に走ってしまう小中学生が存在するとしたらば、これをどういうふうにお考えでしょうか。

小林：えーと、僕の言葉に言い直しますとですね。結

果において、いじめを促進しているような教師が現実にいるんじゃないかと思えます。

そういう現象は、僕はないとはいえないと思えます。私自身たくさんケースを持っています。例をあげますと、小学校の3年生の担任です、男の先生。年齢は47歳、担任の先生で役のない先生。キチンキチンとしないことを大変嫌う日本型の先生です。初め5年6年の担任をしていました。新しく受け持った3年生の子供の世界をよく解らなかつたわけです。僕は言葉からというので、言葉をきびしく教えます。しかし子供は先生に言われても“はい”というふうにキチンと返事が出来ません。“うん”という子が多いわけです。ある子供が元気がなかつたので、“おまえ、今日どうしたんだ。元気がないな”と聞いたところ、“うん”と言う返事が返ってきたわけです。これは先生の教えに反する訳です。そしたら、その先生は“うんというのはうんちに行きたい時しか使ってはいけない”と、そこぐらいでやめておけばよかったのを“お前、うんちして来い”と言ってしまいました。保健委員を連れて便所へ行かしてしまいました。本人はトイレの中でシクシク泣いていたということです。こうした事件からその子は学校へ行かなくなってしまう。“はい”という返事を皆がキチンと出来る様に指導するためには、工夫が必要となります。こういう風にうっかりなりやすいんですね。その意味で教師がいじめの基になっているということはあると思えます。

恩田：それでは後ろの方、どうぞ。

清水：東京いのちの電話の訓練を受けているものです。清水と申します。小林先生にお願い致します。小林先生のお話で、自殺者のうち70%位がうつ病ではないかと推定されるという話がございました。それから補足の時に、精神障害に対する差別感があるし、窓口があっても行きづらい事がある、そういうものは無くしていかななくてはいけないとおっしゃいました。私の考えでは、仮に私自身が正常であったとしても、精神科の先生の相談を受けたいという風な気持ちになる時がある訳です。しかし、社会的な差別感というものが有るとすれば、それを少なくするには、どういう風にすれば良いんでしょうか。

小林：良く解りました。大変良い質問だと思うんです。差別があるという事は自分に関係ないということが前提になっていると思うんです。つまり、自分が精神病だと自覚してれば、他の人が精神病になつたって、あいつもおれも同じだと思うから、馬鹿にすることは無いと思うんで、おれは精神病に絶対ならんと思うからこそ、他人が精神病になつた時、馬鹿にする訳です。ですか

ら、さっき一番初めに申し上げました様に、4人に1人は精神病という現実でありますから、ここに今いらっしゃる方達もですね、全員明日精神病にならんという保障は誰にも無いわけです。そうなりますと、自分なるか妻がなるかなんて時に、第三者がなった場合、馬鹿になんか出来ない訳です。もう自分が身に詰まされますから。つまり、自分になった時、馬鹿にされたくない訳で、あの映画監督の大島渚さんがこういう事、言ってる訳です。差別ってのは、電車の中で足踏まれたのと同じだと。踏まれた奴しか痛みが解らん訳です。これは非常に良い言葉だと思っています。統計上、明日は我が身という事が、本当に理解できてれば、人を差別することは、有り得ないと思えます。

それから、もう1つの、どうしたら差別が無くなるかという御質問ですけれども、やっぱり精神病に対する科学的理解がどうしても必要だと思うんです。

修養が足りないから、あいつはキチガイになつたんだとか、或いは昔みたいに魔女や、魔物が憑いたとか、日本じゃ狐憑なんて言ってますけど、非常に神懸的な事を考えたり、悪いことをしたから前世の罰で知恵おくれになつたなどと考える人がいますが、これはよくありません。もしも精神病というのが、ヴィールスで起きると考えたらどうなるでしょう。それがはっきりした場合は、結核や伝染病と同じことになるでしょう。コレラとかチフスになつた人を馬鹿にする人は誰もいないでしょう。かわいそうに思うかもしれませんが野郎村八分にしようとは思いません。結核なんかでも科学が発達し、結核菌で起こること、ストレプトマイシン等で治るという事が、はっきり判ってから、結核に対する差別は、無くなりました。昔は結核の患者は、差別され、傍へ行くと移るので、付き合わずにおこうとみられたこともありました。それゆえ精神障害も、1つの病気であるという、科学的理解が広まるのが大事だと思います。道徳教育や無理矢理説得して、差別やめろ、といつてもダメです。病気であると徹底的に周知させる事が、大事じゃないかと思えます。

恩田：よろしいでしょうか。それではどうぞ。

松原：ちょっと補足させて下さい。

全く先生のおっしゃる通りだと思います。ただ学校教育という場所で申しますと、先生が不用意に気違いなどという表現を、子供達との話のやりとりの中で使っているという事が、あることを指摘しておきたいと思えます。これを改めなければいかんというのが1点目です。

第2点は生徒が非常に解りにくくなっているということです。次から次へと問題を起こしたり、突飛な事をや

ったりする生徒が出ます。こうした生徒を表現するのに、異常というか病的という以外の良い表現法を持っておりません。異常というのは精神的に異常、あれは病的、そういう風と言われるんです。私どもの教育相談のケースの中で、特に中高生の例では、異常とか病的という言葉が先生がよく使います。しかし私どもが見て、精神科治療を要するという意味での病的異常というのは、10%程度にすぎません。あとの9割の生徒は、随分強い事やりますなあとか、変っていますなあとか、やりましたなあということで、やりとりしていれば済む事なんです。

それから第3点は、親に対して上手に精神科の先生に手渡す時の勧告が、非常に難しいのです。丁寧に、ラポールをつけよく納得して預ければ、一般の先生が考えるほどの難しいことではありません。偏見や誤解を無くす一つの方法として、教師への情報提供や教育、研修をしたり、力が足らぬときは専門機関に、気軽に相談するという様なシステムをつくれれば、今より幾らか良くなるのではないかと考えています。

恩田：はい、どうぞ。

小林：ちょっと追加したいと思います。私の推計によりますと、近い将来差別、というのは、無くなると思うんです。何故かと言うと、皆が、自分の自宅に精神障害者を抱えるように必ずなります。これはちょっと悪い予測でありますけれども、御説明すればなるほどと思っただけだと思います。

アメリカでは20%が精神障害だと言いましたが、我々の推計では、日本で全人口の内おそらく10%位が、精神障害者だと思います。10%ということは、私の家か隣の家のどっちかに精神障害者が1人いるという事です。日本では、差別があるから隠してますので、解らない訳です。私の家なんかでも、私が精神障害者です。さっき言いました様に、十二指腸潰瘍、これはまあ明らかに精神病でありまして、私作家もやってるんですけど、原稿のメ切が近づきますと、十二指腸がキリキリと痛んでくる訳です。原稿書いて渡してしまうと、ピタッと治ります。これはもう全く精神的なストレスで起きますんで、心身症、精神病の一種です。私は精神障害者、我が家に1人いるという訳です。

それからもう一つ、10%精神障害者がいるという事の他に老人問題がからみます。現在、60歳以上の老人は、大体日本の人口の10%に達したという風に聞いています。紀元2000年、あと14年経ちますと、これは20%位に上がる訳です。高度の年寄りボケ、老人痴呆と言っておりますけど、この年寄りボケは、60歳以上で、大体5%

とみなければなりません。自分の名前を忘れてしまったり、今食べた御飯を食べなかったと言って、家人に食って掛かるとか、そういう人が5%に達します。それから寝たきり老人がやっぱり同数位。それから、同じこと何回も何回も繰り返す人、或いはパーキンソンみたいに、手が震えたり、歩き方が異常だとか、顔つきが強ばってしまう人などを考えに入れますと、60歳以上の人のうち、大体50%位は精神的に正常じゃないという風になる時代が、もうすぐそこまで来ています。今、平均寿命が女性で80歳、男性で78歳という風になってる訳ですが、あれは数字の魔術で嘘ですね。これはちょっと考えてごらんになりますと解りますけれども、平均寿命というのは、生きている人と死んでしまった人を足して2で割っている訳です。ですから、例えば1歳で死んだ赤ちゃんと100まで生きた人を足して2で割ると50という数が出る訳です。それから御自分の身の周りで考えれば解る様に、自分の両親、まあ私の場合ですと妻の両親、合計4人の老人がいる訳です。そのうちの半数が精神障害者ということになれば、もう自分の家に精神障害者はいないということはありません。そういう状況が確実に5年ないし10年先には、皆の身の上に来る訳で、そうなる差別なんて言うておられません。私のとこにも出てしまったけど、どうしたらいい、というように皆の知恵を借りる、とそういう時代が必ず来るということですから、差別の問題は自然に解消すると思っております。ただそうなるまでに、現実に差別はある訳で、ここ2、3年とか4、5年に我々の努力で差別をなくして行かなくてははいけないと思っております。

恩田：はい、ありがとうございました。それでは他に……。はい、どうぞ。

小野田：日本大学の心理学科にいる小野田です。今日は青少年の自殺というテーマですが、青少年の大部分の人は学校で生活している時間が、すごく長いと思います。まし青少年の人が、その学校に対して不適應、登校拒否、いじめなどで無気力になり、それが昂じると自殺につながる訳ですが、そういう場合、あくまで学校生活中心でそれを続けていった方が良いのか、別の学校以外で生活をした方がよいのか、それが疑問です。学校以外のことに興味を持っている人がいれば、そこにいけば自殺しなかったのではないかと思います。こんな時はどうしたらいいのか、教えて下さい。どの先生でもいいのですが。

恩田：藤本先生、進路指導の専門家として、何か御意見ございますか。

藤本：創価大学の藤本でございます。今日は静かに聞

いているつもりでしたが、恩田先生に名指しされましたので。

今の御質問の点は、進路指導の問題と離れると思います。御質問の主旨は、義務教育段階でそれ以外の所でその生徒を育てることが出来るかという事でしょう。これは、表立って言えば法律違反なんですね。学校教育法に違反する訳で、従って親が学校教育法の、親としての義務を果たさないことになります。子供本人は法律は強制しておりません。親は学校に子供を出さなければならないというのが、義務になっているんです。親の方が法律違反になる訳です。

ですけれども、世の中にはたくさん、違反している親がいます。確か羽仁さんが子供さんをずっと学校に行かせなかったのではありませんか。中村めい子さんもそうじゃないですか。そういう例があるんです。あれは親は罰せられたんでしょうか、どうでしょうか。御存知ないですか。あれはどうになりました。長岡先生御存知でしょうか。

長岡：そういうケースもあります。就学させなくて、裁判にかかったケースが1つありました。罰金8千円です。(え?..) 8千円。(はっせんえん。) はい。法では千円になってますけど、初めの方はね。(物価に比例して8千円になった。) 岐阜でありました。

藤本：ですから、その8千円の罰金を覚悟して親がやられるんなら、良いだろうと思います。子供さん自身は後でどう思ったか知りませんが、育てられている間は、それで喜々として育っていった訳ですね。大人になってからどういう感想をお持ちになったか知りませんが、ですから今の御質問に対しては、表向きの答えは以上でございますが、その子供さんの将来の為に、どうだろうかと、いうことは、私もケース・スタディをやったので解りません。こういう答えでよろしゅうございますか。

恩田：伺っていて、問題の接点があると思いました。1つは、小中学校は義務教育段階ですが、高等学校以上はどうでしょう。学校辞めて勤めようか、或いは大学あたりで大学辞めて専門的な勉強していこうと、考える場合での進路の問題がありはしませんか。そういう意味で、先生の御意見を伺ってみたいのです。

藤本：私は質問者の方の分だけお答えし、先生はもう少し上の段階で、答えられることを期待なさったのですね。

中学校義務教育段階が終わった後の分については、お子さんと両親が、将来の進路を本当に真剣に考えるだけの姿勢と、考える為のベーシックなデータと申しますか、

我々の方で言いますと、職業的な意識が育っているかどうかという事が大切だと思います。その意識の中には、知的なものも興味的なものも、それから価値感もすべてが含まれます。進路を考えるだけの成熟がなされているか、それに基づいて、学校にするか学校以外にするか、或いは学校にしても正規の学校にするか各種学校にするか、それはもう自由に選んでいいんじゃないかと思うんです。問題はそこ前の考える土台を形づくることに、我々は責任を持たなくてはならないと思っています。

恩田：はい、ありがとうございました。それでは、はいどうぞ。

松原：今の御質問は、所謂義務教育で登校拒否やいじめで学校嫌いになった場合、無理に学校に行かせなければいかんかという御質問だと思いました。私は、ほっといたらいけないと思います。学校も、反省し、親も反省して、できるだけ援助とか助力をして、義務教育の段階では学校へ行く様に努力する事が大事だと思います。しかし、どうしても無理な場合は、途中で辞め、暫く休むといいでしょう。ストップ・アウト制度というのがアメリカにはあります。これは高校でも大学でも同じだと思います。ドロップ・アウトというのは、途中で学校が嫌になって退学する人ですね。高校大学でも、中途退学の人をドロップ・アウトと言っておりますが、ストップ・アウトというのは、学校が面白くない、どうも自分が専攻したいことと違うので、1年か2年考え、休んでみたいという場合を意味します。アメリカでは大学の場合も高校の場合も同じだと思いますが、アルバイトや社会に出て働いてみるケースがあります。時には学校で働き場所を斡旋したりもします。本人が働いている場合には、働き場所をはっきり示しておいて、その上司から毎月学校に報告します。高校なり大学にですね。ちゃんと勤めているとか勤務状態はどうかということ、本人もまた学校にレポートを出します。そして1年経ってやはり学校へ戻って勉強したくなったら、また戻って勉強するわけです。しかし中には、こちらの方が面白いと言う人の場合は退学する人もあります。日本の制度では、休学というと病気の場合医者からの診断書が要ります。経済的な理由だと親からの理由書が必要です。そうでないとなかなか休学出来ません。私は日本に小学校でも中学校でもただ、小学校の場合はちょっと別かも分かりませんが、中学以上だったら、このドロップ・アウト制度、ストップ・アウト制度を持ち込んだらいいと思います。これを大学で今盛んに強調しているんです。大学生の中には、スチューデント・アパシーと言われる人が少なくありません。一生懸命高校まで頑張って、大学に入るのを目

的で入って来たけれども、入ってから全く目標無くし、やる気も無くなってしまいます。アルバイト、或いはクラブ活動に熱中して大学に出てこない人が、どこの大学でも居る訳です。うちの大学なんかだと、1年で15単位とらないと除籍になってしまいます。ですから除籍にしないで、ストップアウト制度で働くように、しむければいいわけです。こうしてやったケースが2人ほどいます。

それからもう1つ、転科ができるようにすればいいと思います。高校なんか絶対にやりません。もっと高校でも大学でも、転学科、転学を大いに奨励する必要があります。或いは、学士入学ができるようにすべきです。中途退学した人が3年編入や2年編入出来る様に。全国の大学がもっともっと生涯教育としてやるべきじゃないかと思うんです。このほか帰国子女の問題があります。帰国子女での入学をうちの大学もやっております。帰国子女の場合、7月に試験をやりますして9月入学なんです、1人の為に試験問題作って、さらに試験やってまた面接やって、大変面倒がかかります。ですから、年によっては志願者が無いときは、よかったなんて喜ぶ先生も居る訳です。そうでなく先生方も基本的な立場で帰国子女を親身になって受入れてあげる必要があると思います。ちょっと長くなりました。

恩田：はい、ありがとうございました。

藤本：え、今の松原先生のストップアウトのお話を聞いて、私補足をしたいと思います。

我々は今までずっと長い間、小中高大を順調に進むのを良しとし、間に浪人だとか遊びだとかいうのを良からざる事として見てきた訳です。今の年になって過去振り返りますと、そう思うのはよくないと考えるようになりました。脇道や遅れていくのも1つの生き方じゃないかという風に思います。ストップアウトもその1つですね。時間や他の経験が我々に教えてくれる事があります。私進路指導をやっておりますが、進路指導の基の考え方は、学校出る時の選択が将来の進路・路をきめるので、出るところの選び方を大事にしよう言ってきたわけです。しかし今、それではいけないと思っています。進路は幾らでも変えられるんだという風に、極端に言うと人生の間には2遍も3遍も仕事変える事が、これからの世の中なのではないか。したがって、1回だけ選び、あんまり拘らない方がいいと思うようになりました。先ほどの質問とも関連しますし、松原さんのお話にも触発されて補足させて頂きました。

恩田：ありがとうございます。それでは次に別な質問がありましたらどうぞ。

榎原：榎原ひろしと言います。横浜大の工学部の1年

です。小林さんにお伺いしたいんです。うつ病による自殺と分裂症による自殺の感情の動きの違い、特に自我と超自我と現実世界の役割について、分り易く解説して頂きたいと思います。また、こうした人がよく遺書を残したりしますね、そうしたものに現われてくる特徴・感情の動きについて分り易く解説して頂きたいんですけど。

小林：分かりました。これは大変な宿題を頂きました。聴衆の方達が専門家ばかりじゃありませんから、超自我と言われましても、超自我の説明からしなければなりません。質問者の方はおそらく御存知だと思いますが、これの説明には時間をとります。今はあんまり詳しい説明はしないで、大略の事をお話しします。詳しい事をお知りになりたければ、後で個人的にお話するか、或いは本でも読んで頂く事で御勘弁頂きたいと思います。うつ病の場合も分裂症の場合も、自殺するケースはあります。ただうつ病の方が多いというのはさっき言った通りであります。衝動的にやるケースが非常に多い訳です。それは両方に共通してます。超自我と自我ということで言えば、自我というのは reality つまり周りの現実です。こんな事やったら両親が悲しむんじゃないかとか、そういうことをちゃんと、自分でわきまえています。これを reality testing と言います。それをやるのが自我であります。超自我というのは心の中の裁判官みたいなもので、言わば、映画で言えば映倫みたいな役割を果たします。お前そんな事考えるなど、それは道徳的に悪いじゃないかと言って自我をコントロールし、なだめる役割を持っているのが、超自我です。ですから、もしもカトリックの信者であれば自殺というのは悪いという風に教られている訳ですから、超自我が非常に頑張り、カトリシアンのかせに自殺なんてけしからんと自分に言いかけ、自殺はできません。要するに自殺した人というのは、超自我が弱まったというか、権力持たないで自我に負けたケースです。自我の方は親なんか悲しんだってかまわない、俺の方が偉いで俺さえ楽になればいいと、こう思うから自殺をやる訳です。そういう点では、うつ病の場合でも分裂症の場合でもそんなに違いはないと思います。ただ死にたいと思うパーセントは圧倒的に違います。分裂症の場合は、どちらかと言えば理性が少し崩れてしまいます。自分じゃ異常な事してもあんまり異常だという気がしないので、死にたいと考えるケースは少ない訳です。もちろん死ぬ人も居りますけどパーセントからいうと非常にわずかです。うつ病の場合は重くなると100%死にたいという風に思う訳です。うつ病の場合は、自分は駄目な人間だ、世の中に俺みたいに不幸な人はいないと思います。本当はお金があるにもかかわらず

ず、世の中で俺が一番貧乏だと、いう風な微小妄想っていうか、自分は非常にみじめで小っぼけなもんだという妄想を持ってしまいます。周りで如実に説得しても納得しないというのが妄想の定義でありますから、財布見せたり、あんた非常に大事な人間だとか色々言ったって、全々ききわけが無い訳です。うつ病の場合は重くなれば100%そういう自殺念慮がありますから、あとは行動に移すかどうかという事だけです。ですから分裂病の場合、超自我が発達してるから自殺しないんだと、そういうことは言えないと思います。

恩田：時間がまいました。まだまだ御質問が出るかと思えますけど、この辺でしめくくらせて頂きます。今日は青少年の自殺という事で、4人の先生方から、多面的にお話を頂いた訳です。自殺者の心理というもの、ある一面だけを見て本当の気持を知っていないんじゃないかと、思います。というのは所謂死にたいっていうのは、本当は自分は生きたいんだっていうのが、本音じゃないかと思うんです。それは、自分は苦しみから脱したいっていうんで、楽に生きたい、その楽に生きる方法を知らないというか、その本当の自分の本心を知らないで、それで死んでしまう。人間には肉体的な死は1回しかない。しかし精神的には何回でも死ぬるということなんです。死ぬっていう事は、本当は生まれ変わる、生きるという事なんです。その生の一面の死という、一の側面だけで見て、本質的な生きよう、生きるんだ、生きてるんだという自覚が足りない、それに気が付かない。それに気が付いた人は、本当に死のうと思った人が、一生懸命動き出し自分だけじゃなくて、人様の為に働くようになるということがある訳です。昔から所謂生死問題といわれます。死ぬということは一面生への一つの側面であるともいいます。先生方がカウンセリングでやっておられる事は、結局自分の生というものを、自覚させようとしているわけですね。自分で責任を持って生きようということです。人間の問題というのは、生きねばならないとい

う事、自分は生きてるんだという自覚、それから一生懸命生きようという気持です。ですから私たちは一生懸命生きてるんだという事の自覚、それを自覚した時に、本当に生きようという気持になっていくのではないかと思います。そのような面で自己受容を促すには、相手の気持を受容するという事です。人間が生きている生命の尊さというものを本当に自覚し、或いは自覚させるということが、自殺を防ぐ一つの基本的な問題と思う訳でございます。朝日新聞に出ていましたか、最近16歳の女子の高校生が友人の自殺について悲嘆していると。先生は強く生きねばならないというが、何の為に強く生きなければならぬのかと問うている。強く生きなければならぬというのは、本当におかしい訳です。生きていくということは、一生懸命生きていく訳なんです。ねばならないとはなんだという訳です。特にうつの場合は、激励したりするとかえって苦しめる訳です。自分で叱咤激励してその上で相手が生きていけないという訳です。本当に生きてる、一生懸命生きてる訳なんです。その事実を知る事によって力が出てくる訳です。こういう問題がカウンセリングとかセラピーとか言われている訳です。教育の問題にもつながる訳ですが、そういう生命の厳粛の事実をはっきり掴ませる必要があります。生命の尊さというものを私たちは子供達、青少年に指導し、それから我々も自覚して生きていくということが必要なんじゃないかなという事を、先生方のお話をうかがって痛感した訳でございます。

貴重なお話を長岡利貞先生、松原達哉先生、内田恵美子先生、小林司先生、本当にありがとうございました。またフロアーの皆様方に色々活発な御意見頂きまして、大変有益な会であったと思います。心から感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

村井：長時間に亘りシンポジストの先生方、それからフロアーの方々、どうもありがとうございました。